

小説

森山啓文学賞

沈黙

岩上町 山口 俊一郎

安らかな死に顔だった。

ずっと出入りしていた教行寺の屋根雪を下ろしていて、足を滑らし転落死したのだった。

白山麓の雪に埋もれたその顔は、長い間の重圧から解放され、自由の天地へ今まさに羽ばたこうとしているかのようにすら見えた。

昭和六十一年一月二十七日、小学校教師北道拓雄は突然の事故による父進の死に直面し、ただただ狼狽していた。

妻の実家と教行寺の助けにより、どうにか通夜・葬儀を終えることが出来た。

それにしても、終生無口な父だった。

二人っきりの家族である拓雄に対しても、必要最小限の言葉しか発しなかった。酒を飲むでもなく、タバコも吸わず、出入りしている教行寺や図書館から借りてきた本を読むことと、古ぼけたラジオを聞くことが唯一の趣味らしきことであつた。しかし身なりはいつも清潔で、身の回りは整理整頓され、しっかりと自分を持つていることは拓雄にも分かつた。

そんな父を、拓雄は心の中で尊敬していた。

拓雄は、自分が育つた黒瀬が好きだった。白峰から、白山麓の

谷間を約八キロ分け入った所にある黒瀬は、少しづつ過疎化が進み戸数も今では二十軒に減ってしまったが、あちこちに思い出が詰まっている。

物心ついた時から、父は校務員として働く傍ら、歴史だけが古い小さなお寺である教行寺の掃除、建物の保守管理、仏事のサポート等を黙々と続けていた。

住職もお寺だけでは生活していけないので、県の河川管理事務所で働き、夫人は郵便局に勤めていた。

住職も父に負けず劣らず口数の少ない人だが、人々からは信頼されているのが拓雄にもよく分かった。

父の死から半年余りが過ぎた八月、拓雄にもようやく父の死を受け入れるだけの余裕が出てきた。

夏休みに入った子供達を連れて妻の深子が実家へ帰った八月のある日、拓雄は思い切って父の遺品を開けてみることにした。

遺品といっても、中くらいの温州みかんの空き箱に二つと、若干の衣類位のものである。

父は生前から、意識的に品物を処分していたような気がした。朝からセミの声がうるさい。

父の物であっても、亡くなった人の遺品を開けてみる、ということとは、一種の緊張感を伴うものである。

夏とはいっても、白山麓の早朝は、どこかヒンヤリした空気が山裾から流れてくる。

それは、これから来る日中の暑さまでの束の間の安らぎのようにも思われた。

明るい縁側に遺品のダンボールを出す。長年の秘密の眠りから

一気に陽の光る所へ出され、亡き父が戸惑い、狼狽しているようであった。

そこには、父の何か大きな秘密が隠されているような予感がした。

ダンボールは二つあったが、中味は拓雄の予想よりもはるかに少なかった。

赤ん坊の自分と両親の写真、亡き母の写真は家の仏間に飾ってあるので目新しくはなかったが、赤ん坊の自分を抱いている母を見るのは初めてであり、拓雄は吸い込まれるように見入っていた。庭か畑で撮ったものらしいが、バックの風景が黒瀬とどこか違っていた。

どれもこれも、品物が少ないだけに、拓雄に強烈な印象を与えた。

その中に、古びた大学ノート数冊に達筆で詳細に書かれた父の自伝史のようなものが見つかった。懐かしい父の字であった。

手に取り、古い順に読み始めた拓雄からは、セミの声も遠ざかり、次第に暑くなってきた周りの気配も去り、身じろぎもせず読みふけた。

明治四十四年、北海道は留萌町郊外の大地主の長男として、北道進は生まれた。

両親は典型的な北海道の大地主であり、先祖は征韓論を主張して下野した西郷隆盛に従い、西南戦争で戦った薩摩藩士とのことであった。

子供の頃から、進は目立つ子だった。

いわゆる文武両道というべきか、地元の小学校でも勉強、ス

ポーツ、そしてリーダーシップにおいても、抜群の存在感を示していた。

長じて、特に剣道が強くなった。札幌の旧制中学では、道内でもトップクラスの選手として名を知られており、又、他校とのケンカにおいても勇名をはせていた。

そんな進の中学時代に、ちよつと変わった友がいた。周りの同級生達も、二人がどうして気が合うのか分からなかった。

札幌市内の浄土真宗のお寺、開宗寺の長男で、広野滋。進と正反對のタイプで、体育は苦手であるが着実に勉強し、いつも一歩一歩前進している風である。

ある土曜日の夜、寄宿舎に居る進は家庭の味が恋しくなり開宗寺へ行く。

寺といつても北海道の寺は、歴史が浅い分どこかモダンな感じがある。滋の母親も心得たもので、進が行くと、若者向きのご馳走を作ってくれる。

夕食後、滋の部屋へ引き上げた二人は、中学卒業後の進路について語り合った。

「オマエは陸士が海兵に行くのか。皆もそう思ってるぞ」と滋。

「イヤ、それより将来は北大へ行きたい。北大へ行つて中学の教師となり、有事の際、日本を救う多くの若者を育てたい。自分一人の力なんて知れたものだ。シゲル、オマエはどうする。仏教関係の方面か」

「まあ、そういうことになるだろう。それにしても、いつも気になつてることが、ススム、オマエの言う日本を救う若者とは、どういう人のことか。オレはオマエが好きだが、その点が気にかかる。留萌の原野から、まっすぐに育ってきたようなオマエは、

正に北海道の空へ昇っていく竜のようではあるが」

「多分、オレとオマエの違いは、そこだろうと思つていた。

今の日本、そして世界を見てみる。絶えず戦雲がどこかで不気味に漂っている。勿論、戦争はやってはいけない。それは最後の手段である。

しかし、今の世界の現状と、これまでの人類の歴史を見た時、大きな動乱が待っているような気がする。もしそうなった場合には、日本は絶対に勝たなければならぬ。それには富国強兵である。心身共に強い、愛国心に満ちた若者を育てなければいけない。そのためにもオレは中学の教師になりたい」

進の熱っぽい話をじつと手を組み合わせて聞いていた滋は、「これまでの多くの戦争を見ても、長い目で見るとそれは問題の解決にはなつていない。多大の犠牲を払った結果、むしろ別の問題を生み出している。日本は島国である。無理な海外進出を止め、平和外交と貿易による立国に徹すれば、国を守り、日本人が堂々と生活していける道があるはずだ。他民族が住む土地へ進出し、そこに新しく自国の権益を確立しようとする時代は、すでに終わっている。そのような人類の歴史の大きなうねりに逆らうようなことは、大きな不幸を招くことになる。」

戦争というのは、文化の違い、お互いの相手に対する無知から始まる。もっと広く、長い目で歴史を見、そして世界の国々を理解しなければならぬ」

「そんなことを言っていたら、日本は滅んでしまうぞ。攻撃は最大の防衛だ。」

他の全ての国々も、オマエの言うような考えならばいいが、今の歴史はまだそんな所にはいない。世界に進出し、優れた日本人

が支配し、より良き社会を作らねばならん」

二人の議論はいつになく白熱し、殆ど口論となっていた。

中学卒業が近い、ということが、若い二人にこれまで以上の切迫感を与えているのだった。そして、そのことが、かねてからの二人の違いにスポットライトを当て、二人の感情を高ぶらせ、結論を急がせているのだった。

共に真面目に、社会と人生を思う二人であるが故に、その晩はケンカ別れとなってしまうた。

昭和三年三月、春とは名ばかりの雪の舞う中、二人は五年間の中学生活に別れを告げ、それぞれの道へと分かれていった。

北大でも、進は目立つ存在となっていた。学校内の建国会へ入会した。会の目的は、一口で言うところと広く海外へ進出し、優れた日本人と日本文化によって理想郷を作り、人類全てが平和に暮らせる世界を作ることであり、そのプロセスでの障害を除去する為には、あえて武力の使用も辞さない、というものであった。薩摩藩士の先祖が留萌の荒野を沃野にしたように、進もその両親もそのことに何の疑問も抱いていなかった。

勿論、剣道の腕前もさらに上達し、全国でも名の通った選手となっていた。

昭和九年、北大を卒業した進は、留萌中学へ教師としての第一歩を踏んだ。

「北道さんの息子さんが中学の先生になって戻って来られた」

故郷の人達は皆喜んで進を迎え入れてくれた。

時は正に昭和六年九月十八日の柳条湖事件に端を発した十五年

戦争の真最中であり、更にその六年後の昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件により、戦時色が一段と加速していった。事件の一週間後、視学官を迎え、校長室で教職員会議が開かれた。

校長の挨拶に続き視学官が立ち上がり、

「かねてから心がけて頂いたことであるが、軍関係の学校、そして満州へ心身ともに健康で、優秀な生徒を選抜してほしい。

当留萌地区は、開拓者魂の残っている農村漁村も多くあり、又健全な気持ちの土地柄でもある。こういう場所こそ、今日必要とされる人材の宝庫である。大いに期待している」

進はその話を聞きながら、心の高ぶりを抑えることが出来なかった。そして、担任するクラスの四十名の顔を、次々と思いつかべていた。

野田良征。何といってもクラスのトップだった。貧農の長男だが、勉強がよく出来た。

家では病弱な父を助けて、農作業の手伝いを実によくやっていた。いつも田畑で働いている姿を見かけると、勉強をする時間があるのだろうか、と思うことがあるが宿題は必ずやってくる。

早速野田の家へ行く。家は小さく、そこに両親と良征の弟一人と妹二人がいた。

「将来は陸士か海兵へやって欲しい」と両親へ頼んだ。しかし、返事は予想した通り、「とてもこの状態では、上の学校へ進ませることは出来ない。父に代わる働き手として、我が家にはなくてはならない」とのことであった。しかし、この野田を農業で終わらせるのはいかにも惜しい。何遍も足を運び、ついに陸士受験を承諾してもらった。

浜坂正と中畑勉。二人は勉強の方は中クラスであったが、何と

いつても身体強健、情緒が安定しており、懐の深さもあつた。

浜坂正は、漁師の三男であり、中畑勉は中堅クラスの農家の二男であつた。

二人の家へ何遍も通い、反対する家族に大陸の魅力を繰り返して説明し、満蒙開拓団の幹部への道へ進ませることに同意してもらつた。

この他にも、進は多くの教え子を軍関係や海外進出の道へと勧めて行つた。これは多分に進の熱意と信念によるところ大であつたが、その他に実家が北海道という留萌の名家であり、さらに北海道の歴史と家風もプラスしていた。

当然のことながら、進の積極的な行動は軍、道や町の注目するところとなり、各種表彰も受けた。

昭和十六年十二月八日、予感があつたが、太平洋戦争が勃発した。

朝学校へ行くと、教師達は一樣に興奮し、「ついにやつた。日本はきつと勝つ」という空気が充満していた。進も心底そう思い、この戦争はどうしても避けられないものであり、ついに決断してくれたか、という思いであつた。

すぐに全校集会が開かれ、校長は、「ついに日本は堪忍袋の緒が切れ、開戦に踏み切つた。日本は絶対に勝つ。諸君も、しっかりと勉強し、家では父母を助け、地域の若きリーダーとして国民を勝利に向かつて引つ張つていって欲しい」という趣旨の話をした。

村長やPTA、その他地元の名士もズラリと参列していた。皆の目は輝き、動作も未だかつて見たこともないように生き生きしていた。私語する生徒もなく、セキ一つない緊張感が満ちていた。

真珠湾攻撃の勝利に続く南方への快進撃、海に陸に空に、日本軍は破竹の勢いであつた。国民全てが狂喜乱舞した。

そんな絶頂期、昭和十七年三月十日の陸軍記念日に進は結婚した。相手は同じ留萌の銀行経営者の娘、上坂美雪であつた。いわば見合い・恋愛結婚であり、進三十一歳、美雪二十三歳であつた。

留萌町で行われた披露宴は、戦時下とはいえども華やかなものであつた。

学校関係者のもとより、軍や大政翼賛会幹部、道知事代理、町長、財界関係者等々、枚挙にいとまがない程であつた。

時節柄としては珍しく、函館の湯川温泉へ新婚旅行にまで行つた。途中札幌で、中学の同級生達とも一席を共にした。

旧友達は、自分たちと同じ悪童時代の時間を持った友が、有名になつたことを喜んでた。

進は楽しかった。こうして美しい新妻を伴つて旧友達にも会えた、ということが嬉しかった。

美雪も同様であつた。
銀行家の娘とはいえ、生まれてから留萌から殆ど出たことが無く、深窓のお嬢さん、ということであつたが、今こうして最愛の夫と共に、札幌で夫の友人達と同席し、「おい、ススム、お前キレイな奥さんもらつたなあ。あのこと、奥さんにバラしてもいいか」という類の男同士の会話を聞いていると、女姉妹しかいない美雪は、一種のカルチャーショックを覚えるのであつた。

進の実家の隣に建ててもらつた新居で、二人は幸せな新婚生活を送つていた。

しかし、昭和十八年に入ると、北海道の留萌にも、戦局の不利

は伝わってきた。

特に進にとつて大きなショックは、かつて自分が強く勧めて、軍や満州方面等へ行かせた教え子達の悲報であった。

しかし、教え子達の葬儀に参列する進の耳に入ってくる言葉は、「名誉の戦死」「お国の為」というものであった。それを聞く度、覚悟していたことではあるが、進の心には黒雲のような後悔と、懺悔の念が湧いてきた。特に息子拓雄の誕生は、進の心に小さな変化をもたらしていた。

しかし、北道進は、これまでのやり方を変えるわけにはいかなかった。

もはや後には引けない。「留萌の、いや北海道の北道進」となつてしまっていた。

最近では妻も「この戦争はどうなるの。こんな時に、未だ教え子を戦場へ行かせてもいいの」と言うようになった。

そのことで、夫婦で口論になることもあった。

今までは内心の不安を隠して、ひたすら進に協力してくれた妻の言葉だけに、進には重く響いた。

昭和二十年八月十五日。

正午に、あらかじめ言われていた通り学校に集まり、校長室でラジオを聞いた。

雑音でよく聞き取りにくかったが「戦争は終わった、そして日本は敗れた」ということがはっきりと分かった。

教師達の間には大きな動揺はなかった。

今日の日が近いことは、皆それとなく感付いていたからである。それよりも、これからの教育内容の変化に伴う生徒指導のあり

方、そして何よりも地元の人々や父兄への接し方へ関心が移つていった。

教育界も、その他全ての組織も、これまで戦争協力を目標としてやってきたし、それは時の世論の大勢であり、人類の歴史的な大きなうねりでもあった。

しかし、人間相手に教育してきた、という教師の場合は、物作りの会社や、デパート等と違って、人に対し信念や行動を教え導く立場にあつただけ敗戦後の変化には不安が大きかった。

校長が、「みなさん、お聞きのとおり、日本は戦争に負けました。全く残念です。

これまで長い間、戦争という国策に役立つ人間を作る、という目標を持って生徒を教育してきたことは事実です。

しかし、今からはその目標が無くなりました。それだけでなく、これまでのやり方が間違っていた、ということの大いに言われるでしょう。

これからは、何かトラブルがあつたら、すぐに情報交換して皆で対処しましょう。決して一人で抱え込まないように。まあ、それほど心配したこともないでしょ。人のウワサも七十五日といひますから」

進は、止むを得ないと思いつつ、信念よりも処世術に長けた校長の言葉に、内心一抹の軽蔑の心が湧いてきた。

さらに校長が、「では、夏休み中でもあり今日はこれまでとしますが、明日から毎日朝礼をします。追つて道の教育委員会からも、指示がくるでしょう。

今はともかく、時の流れを首をすくめてやり過ぎすしかないですな。

あつ、北道君、君は北海道でも有名な先生であつた分、今となつてはそれがアダとなつてしまつたなあ。道々、石をぶつけられないように、気を付けてくれよ」

最後の言葉に、皆はうすく笑つた。

その時進は、大きな失望と孤独を感じた。

確かに校長に言われるまでもなく、昭和二十年八月十五日を境に、留萌の空気はガラリと変わった。

校長が言つたように、さすがに外で石をぶつけられることは無かつたが、言葉の石は充分にぶつけられた。

かつて進が自信満々に軍の方針に沿つた進路を勧め、その結果悲惨な目に合つた生徒達の家族の目は進の心を突き刺した。

「あなたの強引な勧めによつて、ウチの息子は南方で死んだ。あなたは死の教師だ」

「ウチの大事な息子が、満州で行方不明だ。あなたのせいで」

「あなたはこうして生きていて、高い給料をもらい、奥さんと赤ちゃんと楽しく暮らしている」

父兄の言葉は進の心に突き刺さつたが、もう一方で辛かつたのは、かつて模範的な教師だと言つて褒め、持ち上げた元軍関係者、道や町の手のヒラを返したような言動だつた。むしろ、一切の責任を進に押し付けるような雰囲気になつてきた。

「北道先生の暴走で、定員をオーバーして応募したようなこともあつたな」

「あの一家は強引で、思い込みの強い一家やからな」

そして留萌中学の校長を初め教師達も、次第に全ての責任を進に押し付けるような傾向が出てきた。

妻の美雪に対する風当たりも強かつた。

元々女中に囲まれたお嬢さん育ちで、人間の軌轢に慣れていない美雪は、深く傷ついた。

さらにそれに追い打ちをかけるような出来事があつた。

それは、美雪の実家の営む銀行が、敗戦の痛手と戦後経済激変の波にのまれ、倒産してしまつたことである。

留萌の開拓に貢献した地方銀行も、戦後の荒波を乗り越えることが出来なかつた。

もう一つは、農地改革のことである。大地主の北道家はいわゆる不在地主ではなく、小作人を使つて自ら耕作をしていたが、周囲のムードと、北道家と進への戦時中の反感もあり、最小限の家屋敷と周囲僅かな田畑のみを残し、いわば農地改革の先鞭として北道家側があつさりと土地を手放したのであつた。

それでも北道家への反感はなくなつた。

そして昭和二十一年の早春のある晩、拓雄を中心にひっそりと親子三人夕食後のコタツに入つていた時、突然ガラス窓が割れ、布に包まれたコブシ大の石が一個、拓雄の顔の近くに落下した。

布には、「死」とスミで黒々と書かれていた。

進はただ黙つて、妻の背中をさすり続けた。

昭和二十二年の四月、新学期が始まつて間もない月曜日の午前十一時頃、授業中の進の所へ校務員の前田さんが血相変えて飛び込んで来た。

「早く、帰つて、奥さんが」

自宅の仏間に妻は横たわつていた。

居間のイズミには、赤ん坊の拓雄が無心に眠つていた。その横に戦後の物資不足の中、ありつたけのオモチャとお菓子で妻の手

により並べられていた。

妻の顔の白い布を取ると、青白く、しかし穏やかな妻の顔が、進に妻の死という現実をはっきりと突きつけた。

進の父、剛の話によると、

「雪解けで増水した留萌川の高見橋近くを流されていく美雪を発見したのは、北道家の元作男のゲンサクだった。八十歳を越えたゲンサクではあったが、咄嗟に冷たい増水した川に飛び込み、必死の思いで美雪を助けた。しかし美雪は駆け付けた医師の介抱も空しく亡くなった」

警察の調査結果は、誤って川へ転落した、というものだった。

弔問客も帰り身内だけになった時、進は自分の机の上に、小さなコケシ一個と一枚の写真を見つけた。コケシは、妻と新婚旅行に湯川温泉へ行った時、夜の温泉街を散歩していて、妻が、「あつ、このコケシの顔、小学校一年の担任の先生、島村百合子先生にそっくり」と嬉しそうに買ったものであり、写真は、札幌の同級生の集まりの時、進の友人が撮ってくれた二人のスナップ写真であった。それが、進への妻の強いメッセージであることが進にはすぐに分かった。初めて涙が溢れてきた。

その年の夏休みをもって進は中学校教師を辞職した。北海道を離れ、三歳の拓雄を連れて、石川県白峰の黒瀬へ行くこととした。

それは、旧友滋の勧めであった。

戦後、苦しんでいる進に対し、若き開宗寺住職となった滋の方から連絡があり、二人は再会したのであった。

進にとって今では、唯一の心のよりどころは、友人滋であった。

第二次世界大戦に対しても、それはその時世界が通過しなければなら

ばならなかった歴史の転換期であり、それに協力した進に対しては無条件に否定するのではなく、結果は悪でも、その努力に対しては評価するという滋の心根に救われる気がした。

そして、滋の勧めにより、真宗王国・石川県の白山麓にある教行寺を頼って行くことになった。教行寺の住職は、滋の京都時代の学友、とのことであった。

昭和二十二年九月、早くもシベリアから寒気を含んだ風が吹いてくる留萌を後にした。

拓雄と泣いて別れる進と妻の両親に見送られつつ、留萌駅を去る列車の窓から進はいつまでも手を振り続けた。

多分二度と会うことが無いであろう、人々と風景へ向かって。妻の遺骨を抱いて拓雄の手を引っ張り、札幌に立ち寄り滋のお寺で一泊した。

戦争という大きな節目を経験したことにより、二人の心はさらに深く結びついていた。

青函連絡船の甲板から、小さくなつていく北海道の山々を、進は拓雄の手を握りつついつまでも見ていた。

新妻美雪と泊まった函館の湯川温泉、夜の温泉街を散歩した時の妻のあの笑顔、そして土産物店で買った小さなコケシ、妻の美しさに見返る行きかう人々、そんな妻を守つてやれなかった未熟な自分。しかし、妻が執念で残してくれた拓雄と共に、これから新しい人生を始めよう。

青森港接近を知らせるボーという汽笛に、進は拓雄の手を強く握りしめた。

青森港から国鉄駅への通路を、ひたすら急ぎ足で行く人々。

一日半かけて、ようやく白峰の黒瀬へ着いた。北海道よりは暖かかったが、どこことなく秋の気配が忍び寄る教行寺へ着いたのは、夜の七時頃だった。

かねて連絡はしてあり、住職山藤道夫さんと奥さんの教子さんが温かく迎えてくれた。教子さんの案内で風呂へ入れてもらった。

黒々とした、古い造りの風呂場ではあったが、長旅後のお湯は本当にありがたかった。

父親だけが頼りの拓雄は、ぴつたりと進にくつついて離れないのが、進には不憫であった。

四人で夕食を囲む。住職も進も酒は呑まないが、静かで穏やかな夕食であった。

拓雄の為に作ってくれた玉子焼きに、拓雄も徐々に笑顔を見せるようになった。

教子さんからキャラメルをもらって、拓雄はどうとう教子さんのヒザに座るまでになった。

子供のいない住職夫妻は、拓雄をよく可愛がってくれた。夕食後住職が、北海道のことは一切触れずに、「さて、これから

のことやが、しばらく、いや、何時までも良いんやが、これでゆつくりしておつてくれ。これでも一応はお寺やから、あれこれと雑用があるんや。草取りだけでも一仕事や。それを頼みます。

皆が集まるお参りも月二回あるし。

北道さんの仕事は、村長に頼んであるから安心して」白山麓の静かな大自然と、その中で黙々と暮らしている人々の

中で、進は次第に心が平穏になっていった。周りの人々も、住職夫妻の人徳か、進父子には温かかった。そして進の人格が、少し

づつ周りの人々の尊敬を集めていった。

程なく進の仕事と住居も決まった。それは、地区の小学校分校の校務員であり、住居も学校敷地内の元官舎に決まった。

次の年には、教行寺で妻の一周忌も営むことが出来た。地元石工の善意もあり、墓も黒瀬の墓地に作らせてもらった。

黒瀬での生活も次第に軌道に乗っていった。

教行寺住職夫妻とのキズナは次第に深くなり、いまではお経もすっかりマスターした進は、副住職のような立場になり、住職の計らいで得度し、人手不足を補って近隣のお参りに僧侶の務めを果たすようになっていった。

やがて小学校へ入学した拓雄は、地元の大学へ進み、父と同じ教職の道へと入っていった。

そして、教行寺の縁戚の女性、溪子さんと結婚して子供三人にも恵まれ、人々が去って行く過疎地の黒瀬に今も住んでいる。

拓雄は辺りが少し暗くなり、空気も少しヒンヤリして、初めて自分が午前から、途中オレンジジュース一杯飲んだだけで、ズー

と父の大学ノートに取り込まれていたことに気付いた。

ヨロヨロと立ち上がった拓雄は決心した。

「北海道へ行こう。そして、父母の足跡を訪ね、今は亡き祖父母の墓参りもしよう」